

弘道 1122 7 5 8 月号

内藤湖南の支那学と西村茂樹の道徳学



中嶋 嶺 雄

秋田県が生んだ、「支那学」つまり今日的に言えば中国学の偉大な先駆者にして碩学泰斗に内藤湖南がいるけれど、秋田県民の間では意外に知名度が高くない。県内の高校生に講演の際などに問いかけてみても、湖南を知っている生徒は数少ない。

その理由は様々であるが、内藤湖南が県北東端の鹿角市・毛馬内けまなの出身であり、この地は旧南部藩であつて、いわゆる秋田藩ではなかったことにあるいは由来するのもかもしれない。毛馬内の出身者には、十和田湖でのヒメマス（姫鱒）養殖の成功で知られ、私たちが習った教科書にも出ていた和井内貞行わい ちかもいる。

湖南が一番の成績で入学し、また途中で高等師範科に移籍して一八八五（明治一八）年七月、満二十歳で高等師範科最初の卒業生になり、同年九月に北秋田郡（現・北秋田市）綴子（つづりこ）小学校の首席訓導（最上位の教員）になった。秋田大学附属図書館には現在、内藤湖南の「學費日新」と書かれた扁額があるけれど、湖南は当時、期待して入った秋田師範での講義やカリキュラムには失望している。そのことは父・十湾（本名・内藤調一）に送った書信に詳しいが、その最大の理由は師範学校の教育内容が郷里の毛馬内で湖南が修めてきた学問の水準より劣っていたからであつた。現在の秋田県鹿角市かかくにある偉人顕彰館を訪れてみれば驚くほどであるが、我が国本島北端の田舎の最奥の地といつてもいい毛馬内は、わずか二千二百石の桜庭家の領地だったのに、「鹿角学」ともいえる儒学の盛んな学問的伝統をもつ武家村落であつた。とくに湖南の父・十湾は儒者として四書五経はもとより「左

一八六六（慶応二年八月、秋田県境の十和田湖南に位置する毛馬内の土族・内藤家の次男として生まれた内藤虎次郎（十和田湖の南を意味する「湖南」は号）は、十七歳の冬二月上旬頃、三月初旬におこなわれる秋田師範学校（現・秋田大学教育文化学部の前身）中等師範科の入学試験を受けるため、毛馬内から秋田まで、地元の小学校の先生に率いられて、毛馬内出身の三名の受験生と一緒に雪深い米代川に沿って難儀をしながら三日がかりで歩いて来たという（三田村泰助『内藤湖南』、中公新書、一九七二年。なお本書に出てくる「能代川」は米代川（よねしろがわ）のことと思われる）。

伝「史記」になじみ、江戸にも遊学して、のちに『日本外史』の頼山陽に傾倒している。母方（母・容子）の泉澤家も、内藤家と並ぶ「鹿角学」の二本柱であつた。湖南は幼少期からその父に漢文や習字を学び、九歳で尾去沢小学校に入学するまでに「論語」や「孟子」も読んでいたのであつた。そのようにして漢学を学んできた湖南の師範学校時代に注目すべき事柄が二つあつた。その一つは湖南が時代の流れを察知して英語を学び始めたことであり、もう一つはルソーの『民約論』を読んで強い影響を受けたことであつた。いずれも湖南の将来につながる青年期の収穫だったといえよう。湖南は師範学校の卒業生として義務付けられていた郷里の小学校での二年間の教師生活を経て明治二十（一八八七）年夏、英語をもつと学びたいといつた青雲の志を抱いて両親に無断で上京した。湖南二十二歳のときであつた。

やがて湖南は主として『大阪朝日新聞』に依った新聞記者・ジャーナリストから中国学者、そして教育者への道を進んだのであったが、私にとって印象深いのは、彼が秋田から上京して間もなく、日本弘道会の西村茂樹に会い、その門下に連なつて、一時期、日本弘道会の評議員にもなつていたことである。教育にとつて「徳学」がいかに重要かを説き続けたモラリストの西村に湖南が知遇を得た時期には、西村はすでに「小学修身訓」や「日本教育論」を書いていた(『西村茂樹全集』第二卷所収、思文閣出版、二〇〇四年)。湖南の博覧強記からすれば、小学校教師を終えたばかりの彼が西村の教育論を読んで弘道会に参じたであろうことは疑いない。湖南が西村麾下の弘道会の一員であつたという事実は、やがて京都帝国大学教授として教育者となり、当時の支那(清—中華民国)の情勢分析についても、きわめてリアリスティックな道義的観点を示しつつづけた湖南の学問の原点になつていたのではなからうか。

母校の校訓——至誠・進取・勤労



梶田 叡一

鳥取県の米子市立就将小学校に通つていたのは、六十年ほど前のことになる。思い出すたびに懐かしさが込みあがる。

この就将小学校では、事あるごとに中江藤樹先生の名前が先生方の口から出た記憶がある。今は郊外に引越しているが当時の校舎は街中にあり、交差点に面した一画には「中江藤樹先生勉学の地」という石碑が建つていた。そして校訓は、中江藤樹先生の教えから取つたという「至誠」「進取」「勤労」であり、講堂にもこの校訓を大書した額が掲げられていた。

近江聖人と呼ばれた中江藤樹は、江戸時代初期の

一六〇九年に近江の国の高島郡小川村に生まれてい
る。父親は帰農していたので、農家の出と言つてよ
い。しかし九歳の時に、武士の生活を続けていた祖
父の嗣子となり、米子で加藤氏に仕えていた祖父の
下に行き、数年勉強している。その折の祖父の屋敷
が、当時の就将小学校の校地となつていたのであ
る。その後間もなく、中江藤樹は、加藤氏が伊予の
大洲に転封となつたので、祖父に従つて米子の地を
離れる。そして、二十七歳で脱藩するまで大洲の地
で武士としての生活をし、近江の小川村に帰郷して、
四十歳の死去するまで在野の学者として世を送る。
近江に帰つてからは、武士と農民の身分の違いを乗